

聖書：ヨハネの黙示録 1：9～20

説教題：燭台の真ん中にある主

日時：2020年11月15日（朝拝）

今日からヨハネの黙示録の本論に入ります。まずヨハネがどのような経緯でこの書を書き記すようになったかが9～11節に書かれています。ヨハネはこの時、パトモスという島にいました。2回前に見ましたが、この島はエペソから南西へ約100キロメートルほどのところにある島で、ヨハネはここに島流しにされていました。それは「神のことばとイエスの証しのゆえに」、すなわち福音のために忠実に働いていたからでした。当時のローマ皇帝は第11代皇帝のドミティアヌスで、彼は自らを「主にして神」と人々に呼ばせ、国民に皇帝礼拝を求めた暴君でした。その命令に従わないキリスト教会を彼は迫害していました。ヨハネはこの地方の指導的な牧会者であったため、捕らわれの身となり、このパトモス島という流刑地に追いやられる扱いを受けていました。

その彼は自分のことを「あなたがたの兄弟」また「あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者」と言います。まず後半から注目したいと思いますが、そこから分かることは「苦難」と「御国」は切り離せないということです。この「御国」という言葉は、6節に出て来た「王国」と同じですが、私たちが王国とされたこと、その国民であることは、この世においては苦難と切り離せないということです。王国の王イエス様は、この世で人々から苦しめられ、十字架につけられました。ですからその王と結ばれ、御国の民とされた者たちにも苦難はつきものです。イエス様は山上の説教で、もし人々があなたがたをののしり、迫害し、悪口を浴びせるなら、喜びなさい、大いに喜びなさい！と言いました。パウロも使徒の働き14章22節で「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ」と語りました。時々、キリスト教を信じれば、健康も祝され、経済的にも祝されて、困難なことはなくなっていく、良いことばかりに多く取り囲まれるようになると教える人たちがいますが、そうではありません。御国と苦難はセットです。それゆえに3つ目の「忍耐」も必要になります。イエス様も「最後まで耐え忍ぶ人は救われます」と言われました。ちなみにこの「苦難、御国、忍耐」という3つの言葉は、原文では一つの冠詞のもとに並べられています。その意味は、この三つで一つであるということです。これらを切り離して考えることはできません。

ヨハネはこのような状態にある自分を「あなたがたの兄弟」と言い、また「苦難と御国と忍耐」について「あなたがたとともにあずかっている者」と言いました。ですから私たちにもこのことは当てはまるべきであるということになります。果たして私たちに「苦難と御国と忍耐」は見られるでしょうか。「神のことばとイエスの証しのゆえに」生きようとするなら、これらは避けられないトレードマークのようなものであるというここにあるメッセージをまず受け止めたいと思います。

そんなヨハネは「主の日に御霊に捕らえられ」と10節に記されます。「主の日」とはイエス様が復活した日曜日のことです。彼は島流しにされて、ここで一人で礼拝をささげていたのかもしれませんが。その時、彼は御霊に捕らえられて不思議な幻を見させられます。御霊の主要な働きはキリストの栄光を現すことです。彼はここで後ろにラッパのような大きな声を聞きますが、それはキリストの声だったと考えられます(15節参照)。その後ろから聞こえる大きな声はこう言ったと11節に記されます。「あなたがたを見たことを巻物に記して、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアに送りなさい。」つまりこのヨハネの黙示録は、ヨハネが書こうと思って書いたものではありません。彼はこのパトモス島に島流しにされ、主の日の礼拝をささげる中で、キリストご自身が御霊によって現れて、7つの教会にこれらのことを書け！とお命じになったのです。

さて12節から16節には、ヨハネが振り返ってそこに見た光景が記されます。まず彼が見たのは7つの金の燭台でした。これは最後の20節から教会のことだと分かります。これは教会は暗い世にキリストの光、福音の光を放つべきところであるということを暗示しています。マタイの福音書5章16節：「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」

そして7つある燭台、——この7は完全数を意味していて、全時代の全教会を指していると以前に申し上げましたが、——その真ん中に人の子のような方が見ええました。すなわちイエス・キリストのことです。「人の子のような方」という言葉を、私たちは単に人間のような方と理解してはならないと思います。これは前回参照したダニエル書7章13～14節に沿って理解する必要があります。歴史の中に次々に

現れ、誇り高ぶる王が神の前でさばかれた後、入れ替わるようにして、ダニエル書 7 章 13 節に「人の子のような方が天の雲とともに来られた」とありました。そしてその方に主権と栄誉と国が与えられ、その国こそ過ぎ去ることのない永遠の国であると言われました。ですからヨハネが見たのはあのダニエル書が描く栄光に輝くまことの王の姿であったと言えます。その様子がさらに様々な象徴的表現によってここに描かれています。ちなみにここに出て来る言葉はほとんどすでに旧約聖書で使われていた言葉です。今日の私たちよりはるかに旧約聖書に精通していた彼らは、これらの言葉を聞いて対応する旧約聖書のイメージを思い起こしたはずで

まずそのキリストの姿が 13 節後半に「その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた」とあります。これは祭司の姿を思わせるものです。その聖さ、美しさ、高い位がこれらの象徴をもって示されています。次に 14 節に「その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く」とあります。これもダニエル書 7 章で用いられていた表現で、そこでは「年を経た方」、すなわち父なる神を指すものとして使われていました。白は聖さを象徴し、年を経たこととセットで白髪は知恵また威厳を表しています。続いて「その目は燃える炎のようであった」とあります。年を経た方の方であることは弱々しいことを意味しません。眼光は鋭く、その目はすべてを見通す目です。「燃える炎のよう」とあるのは罪や汚れを焼き尽くす火を象徴します。15 節に「その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで」とあります。真鍮は当時一般に武器等に使われる硬い材料で、その足は敵をさばき、足台とする力を持ち、同時に美しさ、聖さを持っています。また「その声は大水のとどろきのよう」とは先のラッパのような大きな声と符合します。パトモス島に打ちつける大きな波の音、水のとどろきよりさらに力強い声ということでしょうか。16 節には「右手に七つの星を持ち」と出て来ます。この 7 つの星は最後の 20 節から「七つの教会の御使いたち」のことだと分かります。7 つの御使いは、7 つの教会と対応しています。そして 2 章 1 節以降、7 つの教会に対して語られる言葉は、それぞれの教会の御使いに書き送れ！とされています。一見どうということかと思いますが、これはおそらく教会を守り、教会を助ける天的な存在のことを語っているものと思われる。教会は単なる地上的存在ではなく、天とつながっている存在であるということです。キリストは地上ばかりでなく、天をも支配の御手の中に収めていることがここに言われていると思われま

16 節の真ん中には「口から鋭い両刃の剣が出ていて」とあります。これを絵に描こうとすると恐ろしい絵になりそうですが、

私たちはこれが意味するところを考えるべきだと思います。黙示録は基本的に象徴的表現で書かれています。これはキリストの口から出る御言葉は力強く、剣のようだというを言っているものと思われます。ヘブル人への手紙4章12節：「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」最後に「顔は強く照り輝く太陽のようであった」とあります。これは比較的私たちに馴染みのある表現かと思います。イエス様が高い山で栄光の姿に変貌された時、その御顔は太陽のように輝いたことが福音書に記されていました。

さてヨハネはこのキリストの栄光に輝くお姿を見た時、死んだ者のように、その足元に倒れました。そのあまりの輝き、美しさ、聖さ、麗しさ、崇高さに触れるなら、人間は誰もが自らの小ささ、罪深さ、醜さを思っこうなるということです。ダマスコ途上で栄光の主にお会いしたパウロも、旧約聖書のイザヤもそうでした。私たちもこの12～16節に描かれているキリストの真の姿を良く仰ぐべきです。この方は私たちが馴れ馴れしく呼びかけたり、近づいて行けるような方では本来ないのです。

しかしここにある慰めは、栄光のキリストが右手を置いて「恐れることはない」と言われたことです。地上におられた時、多くの人に手を置いて、優しく癒してくださいったあの時と同じ慈愛に満ちた主です。その方が続けて言われました。ここにはなぜ恐れることはないのか、私たちが良く耳を傾けるべきキリストのことばがあります。

まずキリストは「わたしは初めであり、終わりである」と言われました。これは1章8節で神について言われた言葉と同じです。つまりキリストは神性において父なる神と等しい存在であるということです。初めから終わりまで、全歴史の上に支配権を持つ主権者なるお方です。

そして18節で「生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」と続けられます。神であるイエス様は人となって十字架にかかり、私たちのために一度死なれましたが、そこから復活して永遠に生きる方とされました。最後の敵である死に打ち勝ち、何にも妨げられることなく、今日も、永遠に生きて

おられます。そしてイエス様のこの十字架と復活のみわざはご自分のためではなく、私たちのためになされたことですから、イエス様はご自身により頼むすべての者たちを自由に、この死に打ち勝ついのちの祝福に生かす力を持っています。さらに「死とよみの鍵を持っている」と言われます。「よみ」とは死者が行くところのことです。キリストは一旦、死とよみの下に服されましたが、その力を打ち破って、今やこの上にも主権を持つ方となられました。「鍵」は出入りすることに対して権威を持つということです。ですからキリストは今や自由に死とよみの力からある人々を解放することができ、またある人々をその下に閉じ込めたままにしておくことができます。もはや死とよみが最終権威を持っているのではない。キリストこそ、それにはるかに勝る主権を持っている方です。このような方を仰いでヨハネは恐れなくて良いのです。またこの書が宛てられた7つの教会も、今日の私たちも、恐れから解放されて歩むことができるのです。

当時の彼らは迫害や困難に囲まれる中で、ともすると不安や恐れや心配で心が一杯になり、そのために心がくじけ、力を落としかねない状況にありました。そして希望を失い、この世からのプレッシャーに負け、この世と妥協する歩みへ進みかねない誘惑がありました。しかしここに「恐れることはない」と言ってくれる力強い主がおられます。その方は「わたしは初めであり、終わりである」と言われる、歴史を初めから終わりまで支配している主です。また十字架と復活を通して、信じる者たちをあらゆる苦難と死を凌駕する永遠のいのちに生かす力を持っている主です。死とよみの上にも圧倒的な支配権を持っている主です。教会はこの方を見上げ、この方に信頼して従って行けば良いのです。その方が19節で「書き記せ！」とヨハネに言われました。そうして彼が記した事柄を以下私たちは見て行くこととなります。私たちはこの栄光の主が7つの教会と、それが意味する全時代の教会に語られた御言葉として、以下のことばに耳を傾けて行くのです。

今日の箇所を通して改めて思われることの一つは、私たちはこの栄光に輝くキリストを正しく仰いでいるかということです。私たちはキリストを地上におられたお姿の延長として考えていてはなりません。イエス様は1回目はしもべの形を取って低い姿で来られました。しかし今や復活して天に上り、この上ない栄光の状態に輝いておられます。私たち人間が見たら、ヨハネのように息もできず、死んだ者のようになって倒れ込むしかないような方です。しかしその方は私たちに右手を置き

て、恐れることはない！と言ってくださいる方です。私たちは13～16節に象徴的に示されたお姿一つ一つを良く心に留めて、キリストをそのような方として、この上ない栄光に輝いておられる主として仰ぐ者とされたいと思います。

そしてもう一つのこと、その栄光の主が燭台の真ん中にいてくださるといことです。すなわち教会の真ん中におられる。言い換えれば教会はこのキリストが真ん中にいてくださるところである。見た目には当時の教会も今日の教会もそれほどの輝きがないように思われるかもしれませんが。しかし天の視点によれば、この栄光のキリストが教会のただ中にいてくださる。そしてただいるだけでなく、教会を導いてくださっています。先にキリストの姿は祭司を思わせるものであると述べました。祭司は神殿で燭台の光が消えないように世話をしました。ランプの芯を削って整え、油を満たし、明かりが明るく灯るようにと。この後、2～3章では7つの教会それぞれに対するキリストのメッセージが記されます。そこには一つ一つの教会に対して称賛したり、叱責したり、激励したり、警告したりするキリストの言葉が出て来ます。キリストはそのようにして燭台の真ん中にいて、教会が燭台として光を放つことができるように心をかけ、世話をし、導いてくださっています。そのキリストの導きによって、色々と欠けや課題がある教会が最後にはどのように変わるか、教会に対する主の約束はどのように成就するかということが、このヨハネの黙示録の最後にかけて描かれて行くこととなります。主は燭台の真ん中におられます。栄光に満ちた主が今日も私たちの真ん中にいてくださいます。私たちは天の視点をいただいてこの事実を受け止め、心から喜び、感謝する者でありたいと思います。そしてこの私たちの真ん中に今日もおられるお方の御声に聞いて、さらなる悔い改めと信仰へと導かれ、いよいよ主の燭台として光を輝かせて、神がキリストにおいて勝ち取ってくださった最終的な救いへ入る教会の栄えある歩みへ導かれて行きたいと思ひます。